

中野敏治先生

●神奈川県・南足柄中学校教頭

全国教育交流会「やまびこ会」代表

生きた通信で思いを伝える。
学級通信は、学級の歴史の缶詰。

通信づくりの第一人者として本誌にもご執筆いただいた山田暁生先生が、残念ながらこの7月亡くなりました。

今年の4月、山田先生が昭和61年に立ち上げた全国教育交流会「やまびこ会」を引継いだのが、愛弟子ともいえる中野敏治先生です。

自身も新任のころから25年間通信を発行し続けてきました。第4回「育て！プリントコミュニケーション」コンクールでは、教育通信「かけはし」がユニークな試みとして評価され、優良賞を受賞しています。

●2WAYの通信を

クラス担任のときには学級通信や数学科通信、そして現在は、学校だより「自他敬愛」の制作を担当している中野先生。長年の通信づくりで常に心にあったのは、子どもや教育に対する「思い」だといいます。

「通信は単なるお知らせではありません。その場でしゃべれば済むことと

紙にしないと伝わらないことがあります。思いや願い、魂を入れなければ『生きた通信』にはなりません」

また、心がけてきたのが、2WAYのコミュニケーションです。

「学級通信をつくるときは、子どもだけでなく、大人を意識した記事を描載します。そうするとリターンがある。お便りコーナーを設けたり、生活ノートを活用したり、また、子どもたち全員を登場させるようにしていました」

単身赴任の父親にも関心を持ってもらいたいと、携帯電話のメールで学級通信のタイトルだけを配信したことも。

「伝えたいという思いがあれば、工夫します。そうしてつくった通信は、学級の歴史の缶詰。いつでも開けられる缶詰です。教師・子ども・親、みんなの宝物になります。保護者の方が、1年間の通信をまとめて冊子にしてくれたことも何度かありました。思いを返してくれたのだなと感じました」

●子どもたちのいい話を伝えたい

「かけはし」は中野先生個人の教育通信です。

「始めて2年がたちました。教育への思い、出会ってきた子どもたちのいい話を誰かに伝えたいというのが、発行の動機です」

現在の読者は約200名。中野先生が異業種交流などで知り合った人々が読者なので、教育関係者だけでなく、一般の人も多く、中には作家やパライピック選手もいるといいます。

「郵送とメール配信の二つの方法を利用していきます。メールを知人に転送してくれる人もいます。一般社会の人々の評価は、教育関係者とはまた違う厳しさがあり、辛口のコメントもありますが励みになります」

●全国規模の教育交流の場に

毎月「やまびこ通信」を会員に郵送したり、年に一度全国から会員が集まって実践発表を行ってきた「やまびこ会」がインターネット方式に切り替わって約5ヶ月。8月現在のアクセス数は2万3000件を超えました。

「アクセスした人は皆会員という考えです。会費はありません。ただ、これまで会員はどこの誰かわかっていませんが、今は相手の顔が見えなくなりました。今後は、夢かもしれないが、

全国規模の教育交流の場をつくりたい。また、学級通信の百科事典のような、Web版の学級通信ファイルをつくりたいと思っています」

●やまびこ会

<http://www.29.atwiki.jp/yamabikokai/>



南足柄中学校の学校だより「自他敬愛」と教育通信「かけはし」。いずれの通信にも中野先生が見つけた子どもたちのいい話が載っている。「かけはし」裏面の「私が出会った子どもたち」の文末は、毎号「子は宝」で結ばれている。